

中世後期・近世ヨークシャ毛織物工業史の再検討

——リーズとヨークの事例より——

小山内 孝夫

序論

1. 中世後期・近世ヨークシャ毛織物工業の状況
2. ヨークシャにおける「都市と農村の結合」：リーズの成功とヨークの失敗
3. 17世紀のリーズにみる「都市と農村の結合」の新局面

結論

序論

かつてわが国の西洋史研究において、「封建制」から「資本制」への移行期とされた中世後期・近世の経済史、わけてもイギリス毛織物工業史はとくに関心を集めた分野であった。そのなかでもヨークシャ西部のウェスト・ライディングは特別の重みを有していたが、それは農村工業といういわゆる「大塚史学」のキーとなる要素を、同地域が典型的に有していたからに他ならない。実際、ヨークシャは「大塚史学」の枠組みに極めて適合的な地域であり、たとえば大塚久雄は農村工業の台頭の一例としてウェスト・ライディングを挙げ、リーズなどここから勃興した農村都市を紹介している¹。他方で中世都市ヨークの衰退がウェスト・ライディング毛織物工業の勃興と並行する事実をみると、「前期的商業資本」「ギルド規制」の拠点である中世都市が衰退する一方で、こうした規制から自由な農村工業を基盤とした農村都市が興隆するという彼の二項対立的な議論は一見説得的であり、ヨークシャの事例をよく説明しているようにもみえる。

しかし、以上のような都市と農村を対立させる理解は、大きく修正されてきた。森本芳樹らのグループによる研究は、こうした修正の動きがヨーロッパ各国について進んできたことを物語っている²。イギリスについても大陸とは別に、都市史研究の進展によって、イギリス都市が農村と対立的という意味での「都市性」(アーバニズム)の伝統を欠いていたことが明らかにされた³。イギリス毛織物工業における都市＝農村関係という本論文のテーマに関しては、坂巻清が、そうした都市史の展開と毛織物工業史を接合しつつ、近世における都市の成長には農村工業との結合が必要であったと主張している。すなわち、農村工業が活発に展開している東部や西部の「森林地帯」もしくは「牧畜・酪農地帯」を後背地とした都市は、問屋制度を繰り広げて生産を統括するか貿易港として農村の毛織物を輸出する。こうした都市では、ギルドの親方層分解やギルド合同が進展して問屋制資本家や商人の寡頭支配が確立し、仕上げ業や流通の中心となって、紡糸・織布業を中心に担当する農村工業と分業関係を形成していたとされている(「都市と農村の結合」)⁴。加えて近年では、ネーデルラント史家の佐

¹ 大塚久雄『大塚久雄著作集 第2巻 近代欧州経済史序説』(岩波書店、1969年)、194-196、277-284、310-316、346頁他。

² 森本芳樹編著『西欧中世における都市＝農村関係の研究』(九州大学出版会、1988年)。

³ 中野忠『イギリス近世都市の展開 社会経済史的研究』(創文社、1995年)、9-12頁。

⁴ 坂巻清「イギリス都市と国民経済の形成」『経済評論』31巻13号、1982年、119-124頁；同『イギリ

藤弘幸が、近世イギリス農村工業が抱えていた深刻な品質問題と、その解決において都市による組織的な品質管理が果たした意義を論じている。これは、単なる工程間分業にとどまらない、品質管理という都市＝農村関係のあり方が存在したことを指摘した点で、坂巻の「結合」論からさらに踏み込んだ非常に重要な視点である⁵。ただ、わが国においては、中世後期・近世イギリス毛織物工業の研究の進展は1970年代以来ほとんど停止した状況にあり、これらの新しい潮流を反映した研究も進んでいないのが実情である。他方イギリスにおいては、同時期の毛織物工業史に関する研究は断続的に続けられている。しかし都市による品質管理の試みに関していうと、たとえばリーズについてもその事実は認められているが、佐藤論文をふまえるならば、その「意義」に対する理解には不十分な点があるように思われる。またこの都市による品質管理という点は、近年の農村工業論の主流をなすといえるプロト工業化論においても、十分に議論されているとはいいがたい⁶。

本論文では、以上の研究史をふまえ、中世後期から近世のイギリス毛織物工業における「都市と農村の結合」のプロセスには、地理的要因に規定された自然発生的な結合と、結合に成功した都市による、制度を通じた農村製品の品質管理という二つの段階があったという仮説を提示し、検証したい。まず第1節では、中世後期・近世ヨークシャ毛織物工業の状況、すなわち中世都市ヨークの衰退と、ウェスト・ライディング農村工業およびリーズなど農村都市の成長を概観し、坂巻の「都市と農村の結合」論に基本的に依拠しつつ、こうした対照を生み出したのが「結合」の成否であったことを確認する。ついで第2節では、「結合」の成否を分けた要因を考察する。その際、ギルドの要因と地理的要因を挙げる坂巻の議論に対し、本論文ではとくに地理的要因を強調する。第3節では、「結合」に成功し発展を遂げる17世紀のリーズにおいて、自治都市化およびカンパニー、コーポレーション設立といった動きが展開された事実を、佐藤が指摘する、品質面で問題を抱える農村工業に対して都市が試みた組織的・制度的品質管理という観点から再検討する。いいかえれば、地理的要因に恵まれたリーズが、自然発生的な「結合」の第一プロセスに一通り成功した上で、都市による農村製品の品質管理という「結合」の第二の段階に入ったという点を強調することにより、坂巻の「結合」論では十分に議論されていない都市＝農村関係の新視角を提供することを目指す。こうした試みは、佐藤の所説に対してイギリス史側から一回答を与えるにとどまらず、毛織物工業史研究全体やプロト工業化論に対しても重要な問題提起となるはずである。

ス・ギルド崩壊史の研究 都市史の底流』(有斐閣、1987年)、287-293、304-307頁。

⁵ 佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント(1)」『東京外国語大学論集』47号、1993年、163-183頁；同「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント(2)」『東京外国語大学論集』48号、1994年、249-269頁；同「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント(3)」『東京外国語大学論集』49号、1994年、105-125頁；同「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント(4・完)」『東京外国語大学論集』50号、1995年、13-33頁；同「〈再考〉都市工業と農村工業」道重一郎、佐藤弘幸編『イギリス社会の形成史 市場経済への新たな視点』(三嶺書房、2000年)。

⁶ D. C. Coleman, 'Proto-Industrialization: A Concept too Many', *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. XXXVI, No. 3, 1983, 435-448; F・メンデルス(田北廣道訳)「プロト工業化 理論と現実」『福岡大学商学論叢』32巻1号、1986年、95-128頁；L・A・クラークソン(鈴木健夫訳)『プロト工業化 工業化の第一局面?』(早稲田大学出版会、1993年)。

1. 中世後期・近世ヨークシャ毛織物工業の状況

本章では、まずH・ヒートン、J・N・バートレットらの先行研究に基づき、中世後期から近世におけるヨーク毛織物工業の衰退と、ウェスト・ライディング毛織物工業およびリーズその他農村都市の成長を確認し、こうした動きと農村工業との関係を検討する。

(1) 中世都市ヨークにおける毛織物工業の衰退

中世盛期において、ヨークはヨークシャのみならずイングランドを代表する大都市であり、毛織物工業は長距離貿易とともにその繁栄の基盤をなしていた。ヨークの毛織物工業は早くも12世紀からすでに重要であり⁷、ギルドのもとで生産されていたヨークの毛織物は高価な輸出品としても知られていた⁸。その後、同市の毛織物工業および織布工ギルドは、13世紀から14世紀前半にかけて苦境に陥るものの、14世紀半ばには立ち直り、以後15世紀初めまで未曾有の繁栄を謳歌した。これは、たとえば織布工、縮絨工、剪毛工、染色工、タピタ、および生産者と輸出商人を仲介する呉服商（ドレイパ）といった毛織物関連業種のフリーメン認可数の増加、また、より小規模な諸手工業者の専門化・増加にもあらわれている⁹。

ところが、15世紀に入るとヨークの毛織物工業は再び衰退し、結局この衰退から復活することはなかった。その様子はフリーメン登録簿に表れており、毛織物関連職種の新登録数は、とくに15世紀後半に大きく減少している。また織布工ギルドも、15世紀第4四半期に、彼らの特権に対する国王への支払いを免除された。16世紀に入ると、毛織物業関連職種の新しいフリーメン登録数は、さらに大きな落ち込みをみせる¹⁰。1561年の都市法人の議事録は、市内の織布業がもはや風前の灯であり、毛織物工業はヨークシャ西部に移動してしまったことを嘆いている¹¹。

中世末期におけるヨークの繁栄が、毛織物工業と長距離貿易に立脚していた以上、毛織物工業の衰退は、15世紀後半以降の長距離貿易の不振ともあいまって、同市の経済全体、および人口にも影響を及ぼした¹²。16世紀前半におけるヨークの人口に関しては、バートレット、

⁷ たとえば1164年のパイプ・ロールにおいて、ヨークの織布工ギルドが自らの特権への見返りとして財務府へ支払った金額は、ロンドンの織布工ギルドに次ぐ全国第2位となっている。H. Heaton, *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries from the Earliest Times up to the Industrial Revolution*, 2nd ed., Oxford, 1965, pp. 2-4.

⁸ *Ibid.*, p. 7.

⁹ たとえば織布工、縮絨工、剪毛工、タピタ、染色工に関して、1361年から1371年までの10年間のフリーメン認可数は152人にのぼり、おそらく史上最高の水準であったとされる。さらに1371年から1401年までの各10年間のフリーメン登録数についても毛織物工業関係者の割合が12%を下回ることにはなかった。J. N. Bartlett, 'The Expansion and Decline of York in the Later Middle Ages', *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. XII, No. 1, 1959, p. 22, Table 1, pp. 23, 25, 27. ここにいう「フリーメン」とは、世襲・徒弟奉公・購入のいずれかの方法により市民権を獲得し、営業権を獲得した者のことである。酒田利夫『イギリス中世都市の研究』（有斐閣、1991年）、110-111頁。

¹⁰ 織布工の10年当たり平均のフリーメン認可数は、14世紀後半の50人強から15世紀後半には25人程度に減少した。また毛織物に関連する上記5職種のフリーメン認可数の合算は、15世紀前半の50年には430人であったのに対して、15世紀後半には331人、16世紀前半においては96人にまで減少している。また同5職種のフリーメン登録数全体に占める割合も、14世紀後半において12%を越えていたのに対し、16世紀前半には4%程度にまで落ち込んでいる。Bartlett, *op. cit.*, p. 22, Table 1, pp. 29-30.

¹¹ 酒田、前掲書、112-113頁。

¹² バートレットは中世末から近世にかけてヨークが直面した衰退の根本的な原因は、毛織物工業と長距

パリサ、酒田らがみな 8,000 人前後という、14 世紀後半から 15 世紀の人口 (11,000~12,000 人) と比べて非常に少ない数字を推測している¹³。この時期の市財政も逼迫しており、都市収入請負 (fee farm) の減額・免除が繰り返され¹⁴、また建築活動も不活発であった¹⁵。他都市と比較しても、1377 年の人頭税担税者数では最大の地方都市であったのに、1524-1525 年の特別税担税者数では第 5 位、1524-1525 年の特別税課税時の富の査定額では第 9 位にまで落ち込んでいる¹⁶。

もっとも、ヨークの毛織物工業とは異なり、同市自体は不可逆的に衰退したわけではなく、16 世紀後半、とくに第 4 四半期以降、同市の経済状況は好転した。1561 年、ヨークに北部評議会 (The Council in the North) および北部高等宗務委員会 (The High Commission for the Northern Province) という二つの重要な政治機関が設置されると、同市ではジェントリその他の都市来訪者の消費財需要をあてにしたサービス業が繁栄の機会をえた¹⁷。また長距離貿易についても、ロンドンによる独占状態が 16 世紀半ばすぎに崩れ、地方港が復興を遂げる中で、ヨークとその外港キングストン・アポン・ハルの貿易も立ち直り、ヨーク経済の復興に大いに寄与した¹⁸。対照的に、この時期においても毛織物工業は目立った回復をみせていない¹⁹。したがって、等しくヨークを衰退に導いたといっても、これら二部門を一括りに扱うことはできない。他の中心的な地方都市が、いずれも同時期に毛織物工業の衰退を経験しつつも、ヨークほどの決定的な衰退はみずに、より成功裏に工業的利害を維持ないし獲得していた事実に鑑みても、ヨークにおける毛織物工業の衰退の程度は際立っている²⁰。

では、このような衰退の要因は一体何であったのか。まず、ヨークの毛織物が高級品・輸出品であったことから、15 世紀初めからの同市の長距離貿易の停滞は、重要な製品のはけ口

離貿易という二大部門の衰退にあったと主張したが、この見解は D・M・パリサによっても支持されている。Bartlett, *op. cit.*, pp. 20, 33; D. M. Palliser, 'A Crisis in English Towns? The Case of York, 1477-1566', *Northern History*, Vol. XIV, 1978, p. 115; *id.*, *Tudor York*, Oxford, 1979, pp. 218, 271. 毛織物工業と並ぶヨークの二大部門のもう一方である長距離貿易の動向については、出羽秀明「中世後半 York における貿易の衰退」『東海学園女子短期大学紀要』23 巻、1988 年、15-29 頁; J. Kermode, *Medieval Merchants: York, Beverley and Hull in the Later Middle Ages*, Cambridge, 1998.

¹³ Bartlett, *op. cit.*, p. 33; Palliser, *op. cit.*, pp. 202, 211-212; 酒田、前掲書、56 頁、表 3-1。都市経済の状況が人口動向に及ぼす影響については、C. Galley, 'A Model of Early Modern Urban Demography', *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. XLVIII, No. 3, 1995, pp. 448-469.

¹⁴ Palliser, *op. cit.*, pp. 82-83, 203, 215-217.

¹⁵ 酒田、前掲書、78-83 頁。

¹⁶ Palliser, *op. cit.*, p. 202; A・ダイヤー (酒田利夫訳)『イギリス都市の盛衰 1400~1640 年』(早稲田大学出版部、1998 年)、90-91 頁、付表 1、92-93 頁、付表 2、96-97 頁、付表 4。

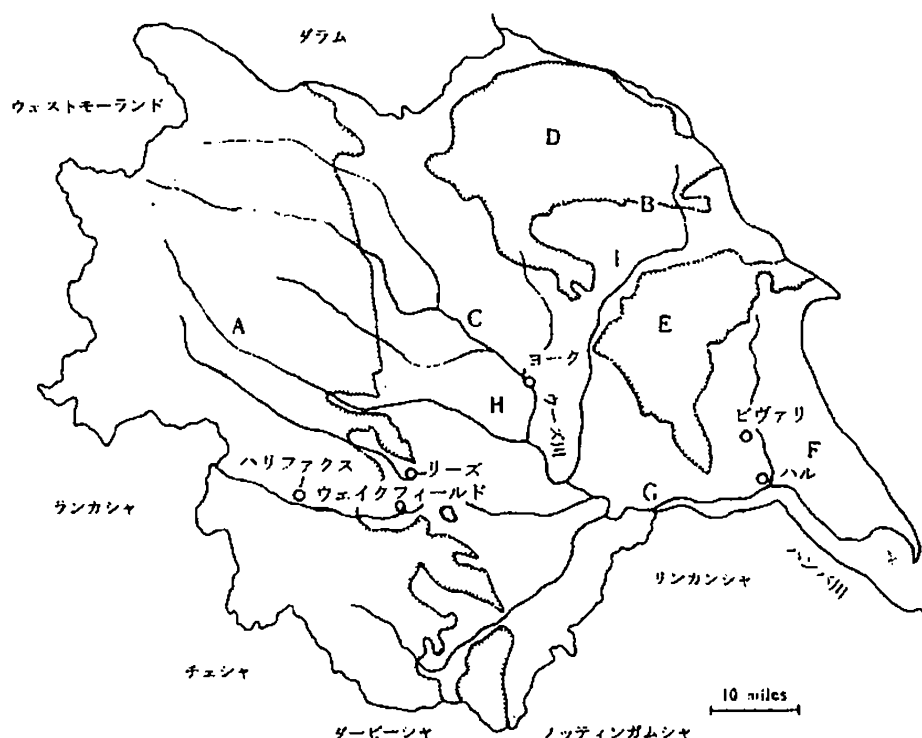
¹⁷ Palliser, 'A Crisis in English Towns?', pp. 120-121; *id.*, *op. cit.*, pp. 4, 50-52, 162-173, 262-264; P・クラーク、P・スラック (酒田利夫訳)『変貌するイングランド都市 1500-1700 年 都市のタイプとダイナミクス』(三嶺書房、1989 年)、83 頁; 酒田、前掲書、第 5 章。このような経済の復興を受けて、16 世紀後半以降にはヨークの人口も回復・増加に転じた。パリサは 17 世紀初頭において 11,500 人程度、酒田も同じ時期に約 11,000 人、C・ギャリーも 1600 年において 11,000 人程度と推測している。Palliser, *op. cit.*, p. 285; 酒田、前掲書、56 頁、表 3-1; Galley, *op. cit.*, p. 451.

¹⁸ Palliser, *op. cit.*, pp. 271-273.

¹⁹ ヨークは、16 世紀までには毛織物工業の中心地としての地位をほとんど失っていた。*Ibid.*, pp. 208-210.

²⁰ クラーク、スラック、前掲書、81 頁。もっとも、この毛織物業の喪失を、「中世的織物工業特化型」から「消費要額充当型」の都市への転換としてポジティブに評価する向きもある。渡邊文夫「16 世紀地方都市の経済消長 ヨークの場合について」イギリス中世史研究会編『イギリス中世社会の研究』(山川出版社、1985 年)、275、280 頁。

図1 ヨークシャ農業地域図



牧畜農業地域

- A. ペナイン地域 (The Pennines, 牛馬飼育・酪農)
- B. ピッカリング・フォレスト (Pickering Forest, 酪農・豚馬飼育)
- C. ガルターズ・フォレスト (Galtres Forest, 家畜肥育・豚飼育)

混合農業地域

- D. 北ヨークシャ荒地 (North Yorkshire Moors, 牧羊・穀作)
- E. ヨークシャ・ウォルズ (Yorkshire Wolds, 牧羊・穀作)
- F. ホルダーネス (Holderness, 穀作・家畜肥育)
- G. ウーズ＝ハンバ湿地 (The Ouse-Humber Marshes, 穀作・家畜肥育)
- H. ヨーク河谷 (Vale of York, 穀作・家畜飼育・肥育)
- I. ピッカリング河谷 (Vale of Pickering, 穀作・家畜飼育・肥育)

酒田『イギリス中世都市の研究』、126頁、図3-1より作成。

の喪失として、大きな影響を及ぼしたのであろう。しかし、農村毛織物工業との競争の激化は、より深刻な打撃となったと思われる。ヨークの毛織物生産者からの農村工業に対する苦情自体はかなり早期からみられるとはいえ、1400年前後におけるウェスト・ライディング農村工業の台頭とヨークなどの都市工業の衰退は、まさに「ヨークシャ毛織物工業の巨大な変化」

であった²¹。以下では、このウェスト・ライディング農村工業の展開をみていく。

(2) ウェスト・ライディング毛織物工業と農村都市の興隆

ヨークシャー西部に位置するウェスト・ライディングでは、13世紀から、リーズ、ウェイクフィールド周辺などで毛織物工業が営まれていた²²。14世紀末からは、不規則ではあるが、毛織物検査官会計記録 (the Ulnager's Accounts) によって、ヨークシャー各地における毛織物の生産数が記録されるようになる。14世紀末の記録では、生産量上位の都市・地域のなかにウェスト・ライディングの地名はほとんどみられないのに対し、15世紀後半には、同地域の主要な地名が上位に顔を出しており、農村工業の飛躍的成長が容易に看取される²³。なかでも躍進著しいのがハリファクスであるが、リーズ、ウェイクフィールド、ブラッドフォードなどにおいても、毛織物工業は着実に発展した²⁴。15・16世紀にはすでに、ヨークシャーはイングランド西部、イースト・アングリアとともにイングランドを代表する毛織物工業地域となっており²⁵、さらに18世紀のうちにこれらの地域を凌ぎ、イングランド第一の毛織物生産地帯となった²⁶。

こうした農村工業の著しい成長に伴い、リーズ、ウェイクフィールド、ハリファクスなどが台頭した。13世紀半ばから14世紀にかけて農村市場としても発展したこれら集落を、坂巻は単なる工業村落とは区別して「毛織物工業町」とよんでいる²⁷。リーズでは13世紀という早期から毛織物工業が展開され²⁸、そして毛織物検査官会計記録に記された生産量にもリーズの工業的発展が示されており、14世紀末と1460年代・1470年代の生産量を比較しても、着実な発展がみてとれる²⁹。とはいえ、リーズの生産量の増大はハリファクスのそれと比べると緩やかであった。これは同じ「毛織物工業町」であっても、リーズがハリファクスなどと異なる性格を有していたためであると考えられる。すなわち、毛織物工業地域は、羊毛供給と同時に製品市場を提供する流通中心地、仕上げ業を行う仕上げ中心地、また工業人口を養うための穀物市場を必要としたが、こうした市場町として発達していたのがリーズやウェイクフィールドであったのである³⁰。

²¹ R. G. Wilson, *Gentlemen Merchants: The Community in Leeds 1700-1830*, Manchester, 1971, p. 9.

²² Heaton, *op. cit.*, pp. 5-6. しかしこれら特権都市外の「農村」の毛織物は品質面で劣る粗い織物で、この点当時の都市が輸出向けの高級品を産していたのとは対照的であった。ウェスト・ライディング産の毛織物は、19世紀まで一貫して低い等級であったとさえいわれる。*Ibid.*, pp. 7, 19-20.

²³ *Ibid.*, pp. 68-76, 127. この毛織物検査官とは、販売用の毛織物に課せられた特別税を徴収するよう任じられた人々である。家内消費向けに織られる毛織物は彼らの検査対象とされていなかったため、検査官の記した数字は市場向けに生産された毛織物のみを表すにすぎないなど批判も多い。*Ibid.*, pp. xiii-xv.

²⁴ ハリファクス地域の発展は同時代人にも強い印象を与えている。*Ibid.*, pp. 76-78. 16世紀のウェスト・ライディング毛織物工業の展開については、*Ibid.*, pp. 79-84.

²⁵ *Ibid.*, pp. 84-88.

²⁶ Wilson, 'The Supremacy of the Yorkshire Cloth Industry', in N. B. Harte and K. G. Ponting (eds.), *Textile History and Economic History: Essays in Honour of Miss Julia de Lacy Mann*, Manchester, 1973.

²⁷ 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」『史学雑誌』76編9号、1967年、3-5頁。

²⁸ Heaton, *op. cit.*, pp. 5-6; 武居良明「領主的バラ・リーズにおける毛織物工業の展開 (一) 保有地分化との連繋の下に」『社会経済史学』24巻4号、1958年、35-36頁。

²⁹ Heaton, *op. cit.*, pp. 70-75; 常行敏夫「リーズの自治都市化と毛織物工業 イギリス絶対王政末期の地方都市における産業統制策に関する一試論」『専修経済学論集』12巻2号、1978年、97-98頁、表2、3。

³⁰ Heaton, *op. cit.*, pp. 77-78; 常行、前掲論文、99頁。

16世紀のリーズは、毛織物工業が周辺の村落へ移動するという、中世末期のヨークと同様の危機に直面したものの³¹、仕上げ・流通への特化に活路を見出した。坂巻によれば、17・18世紀を通じて商業・仕上げ業の中心地に転換することによって、「毛織物工業町」は「農村都市」としての体裁を整えた。これこそ、彼のいう「都市と農村の結合」のヨークシャにおける実態であった³²。わけてもこうした転換の傾向が顕著であったのがリーズで、17・18世紀にはウェイクフィールドを凌いでウェスト・ライディング第一の商業都市となり、19世紀にもその商業的優位を維持していた³³。仕上げ業に関しても、リーズが18世紀にはその中心地であった³⁴。このように、近世のリーズはウェスト・ライディング毛織物工業の一大中心地として、まさに同地域と「結合」しながら発展したのである。

(3) 近世都市の成長と「都市と農村の結合」

このように、ウェスト・ライディングにおいては、農村都市へと成長した毛織物工業町が、仕上げ・流通の拠点として農村工業の成長を牽引していた。これら農村都市は、確かに法制上は「農村」であったが、実際にはその機能は中世都市と同様「都市」的な機能を果たしていた。逆に、中世都市にも、これらの農村都市と同様、農村工業と手を携えて発展するものがあつた。実際、15世紀半ば以降、イングランド中で農村工業との競争により古い中心的都市から毛織物工業が失われるなかでも、ノリッジ、エクセタなどいくつかの中世都市は毛織物工業によって繁栄している。坂巻によれば、そうした都市は、農村工業が活発な東部や西部の「森林地帯」もしくは「牧畜・酪農地帯」を後背地とし、問屋制度によって生産を統括するか、貿易港として農村の毛織物を輸出していた（地理的要因）。これらの都市では、ギルド親方層の分解やギルドの合同の進展により、問屋制資本家や商人の寡頭支配が確立し、仕上げ業や流通の中心となることで農村工業（紡糸・織布業を中心に担当）と分業関係を形成し、いわば「都市と農村の結合」に成功したのである（ギルドの問題）³⁵。一部の都市がこのように農村工業に便乗しえたことの背景には、農村工業は元来紡糸・織布業を中心とした非熟練労働による貧農の副業であつて、熟練を要する仕上げ業や染色業については、都市に依存せざるをえなかつたという事情があつたともいわれる³⁶。

ここで問題となるのは、ヨークシャにおける「都市と農村の結合」が、中世都市ヨークで

³¹ 武居「領主的バラ・リーズにおける毛織物工業の展開（二） 保有地分化との連繫の下に」『社会経済史学』24巻5・6号、1959年、161-163頁。

³² 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」、6-7頁。18世紀のヨークシャ毛織物工業では、紡糸と織布はウェスト・ライディングの農村部で、染色、剪毛、仕上げ、市場取引は都市で行われていた。Heaton, *op. cit.*, p. 289. ここでいう都市とは「毛織物工業町」から発展した「農村都市」のことである。

³³ Wilson, *op. cit.*, pp. 18-19; 常行、前掲論文、100頁。

³⁴ Heaton, *op. cit.*, p. 274. 16世紀リーズの大織元たちの遺産目録がすでに、彼らが仕上げ業に特化していたことを示している。坂巻、前掲論文、7-11頁。

³⁵ 坂巻「イギリス都市と国民経済の形成」『経済評論』31巻13号、1982年、119-121, 123-124頁（坂巻、前掲書、291-293頁に再録）。もっとも、農村工業に便乗し分業関係を結んだ中世都市が存在したという事実自体は、樋口徹によっても早くから指摘されている。樋口徹「前期的資本の範疇転化について」『東京大学経済学研究』3号、1964年、72-74頁、76頁、注(10); 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」、34-36頁、注(6)。

³⁶ 坂巻、前掲書、293-294頁; 安元稔『イギリスの人口と経済発展』（ミネルヴァ書房、1982年）、241-242頁。

はなくリーズに代表される農村都市と周辺農村との間で達成されていたという点である。上にみたように、都市にとって農村との「結合」とは、具体的には仕上げ・流通中心地への転換であった。しかしバートレットがいうように、ヨークでは仕上げ業者が他都市のように繁栄をみることはなく、この転換に失敗してしまう³⁷。すなわち、ヨークの「衰退」の根本的原因の一つは、毛織物工業において農村との「結合」に失敗したことであったのである。他方、リーズの発展もまた、ウェスト・ライディング農村工業との結合に負っていた。したがって以下では、両都市における「結合」の展開について検討し、その成功、あるいは失敗の原因を明らかにする。

2. ヨークシャーにおける「都市と農村の結合」：リーズの成功とヨークの失敗

(1) リーズによる「結合」の成功と地理的要因

まず、「都市と農村の結合」の第一の段階である、地理的要因に規定された自然発生的な「結合」について、リーズの事例を通じて検証する。ところで、そもそも「結合」の前提となる農村工業の発展は、いかなる条件下で可能になるのか。この問題をめぐっては、農業経営の中心が穀作か牧畜か、ひいてはそれを決定する自然条件を重視する J・サースク、権力関係の錯綜などにより生じる法的にルーズな状況など、社会的環境を重視する A・エヴェリットらの研究が知られている³⁸。こうした研究史をふまえ、ウェスト・ライディングの農業様式、および社会的環境についてみていこう。

サースクは近世イングランドの農業分布について、主に牧畜を生業とする北部・西部のハイランド地域、穀作と家畜飼育を組み込んだ混合農業を行うローランド地域など、地帯上の区分と農業様式の対応関係を指摘した。その上で、穀作に適さず、しかも分割相続慣行が優勢であるため個々の土地保有が小規模で、農業によって生計を立てることが困難な前者の地域において、副業として農村工業が発展したと主張する³⁹。ウェスト・ライディングの農業様式をみると、この地域はハイランド地域に属し、牧畜農業そして分割相続慣行という、農村工業を生み出しやすい条件を典型的に備えていたことが指摘されている(図1参照)⁴⁰。

ついで、ウェスト・ライディングの社会的環境を考察するに際しては、閉鎖型村落(closed villages)と開放型村落(open villages)というイングランド農村の二類型に関する議論が援用されよう。閉鎖型村落では、領主の統制力が強く、また穀作が優勢であるため製造業は発達しにくい。他方、開放型村落では領主による独占的土地所有はみられず、一般に社会的統制も弱い。このため、農民が商工業をも営んで、いわゆる農村工業が発生しやすいのである。ここで重要なのは、閉鎖型村落は穀作地帯に多く、開放型村落は牧畜地帯に多かったことである⁴¹。よって牧畜農業地域とされるウェスト・ライディングも、開放型村落が多数派で、ルーズな社会的構造を有し、農村工業が繁栄しやすい環境にあったと考えることが可能であ

³⁷ Bartlett, op. cit., p. 32.

³⁸ 篠塚信義「フォレスト、王領、そして農村工業」世良晃志郎編『ヨーロッパ身分制社会の歴史と構造』(創文社、1987年)、453-456頁。

³⁹ J. Thirsk, 'The Farming Regions of England: A. The Structure of Regions', in id. (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. IV, 1500-1640, Cambridge, 1967.

⁴⁰ Thirsk, 'The Farming Regions of England: C. Yorkshire and Lancashire', in *ibid.*, pp. 28-32.

⁴¹ 須永隆「イングランドにおける二つの農村構造『閉鎖型村落』と『開放型村落』の社会学」『亜細亜大学経済学紀要』28巻2・3号、2004年、29-53頁。

る。実際、同地域には、複雑な土地所有関係ゆえに「権力の真空状態」が生まれ、通常のマナにおけるよりも土地保有者の自由な経済活動が可能で、先にみたルーズな社会的環境が存在したといわれる⁴²。このように、ウェスト・ライディングには、農村工業を生み出す二大条件、すなわち牧畜優位の農業様式と、法的・社会的にルーズな状況が揃っていた。

ところで、ウェスト・ライディングが農村工業の発展しやすい環境にあったとしても、なぜそれを最も成功裏に掌握した農村都市がリーズであったのであろうか。ウェスト・ライディングの内部でも、リーズが位置する東部の混合農業地帯に対し、牧畜地帯である西部には自立が困難な小織元がおびただしく分布し、とくに典型的に農村工業が展開されていた。したがって、同地域東部のリーズよりも、西部に位置するハリファクスの方が、あるいは農村工業を掌握するのに恵まれた立地にあったともいえる⁴³。しかしながら、和田将幸によれば、ウェスト・ライディング農村工業の発展においては、生産中心地として比較優位な条件を備えたハリファクスやブラッドフォードと、それらと食糧・原料供給地（ここではヨークシャ東部）をつなぐリーズやウェイクフィールドのような都市が、互いに連携できる範囲内に存在していたことが重要であった⁴⁴。すなわち、リーズの方が「市場町」としてハリファクスよりも立地的に恵まれていたがゆえに、農村工業との結合をより成功裏に達成することができたのである。また、最大の生産中心地たるハリファクス近辺の製品がハルを通じて流通するためには、リーズを経由する必要があったため、リーズ商人が長い間流通や仕上げを独占しえたという事情もあった⁴⁵。このようにリーズが農村との「結合」に成功した背景には、まず地質・地形的に農村工業を発展させやすい地域が近隣に控え、そしてヨークシャ西部の主要工業地域と、州東部の穀物供給地および主要輸出港ハルとの中間に位置するという、リーズの地理的要因が大きく作用していたといえる（図1参照）。

(2) ヨークによる「結合」の失敗と地理的要因

ついで、農村との「結合」に失敗したヨークの事例を検証したい。先にみた通り、イギリス毛織物工業の主導権が都市から農村へと移行していた15・16世紀に、ヨークが毛織物工業における中心的地位を喪失した主要因は、農村との「結合」の失敗であったと考えられるが⁴⁶、坂巻はその原因として、まずギルドの問題を挙げる。すなわち、親方層が分解しなかったヨークの手工業的ギルドにおいては、中小親方層が排他的なギルド規制を強化し、農村との「結

⁴² 篠塚、前掲論文、492-500頁。

⁴³ Heaton, *op. cit.*, pp. 94-96; 矢口『資本主義成立期の研究』（有斐閣、1952年）、215-222頁; P・ハドソン（篠塚信義訳）「マナーからミルへ 移行期のウェスト・ライディング」F・メンデルス、R・ブラウン他（篠塚信義、石坂昭雄、安元稔編訳）『西欧近代と農村工業』（北海道大学図書刊行会、1991年）、69-75頁。

⁴⁴ 和田将幸「イギリスにおけるプロト工業化論の再検討 ヨークシャ・ウェストライディングの事例から」『関西学院経済学研究』35巻、2004年、227-228頁。

⁴⁵ Wilson, *op. cit.*, pp. 58-59.

⁴⁶ 15世紀以降にはウェスト・ライディング農村工業とロンドン商人との直接的結合もみられ、これも同地域とヨークとの結合にとって大きな阻害要因となったはずである。Bartlett, *op. cit.*, p. 32. ただ、16世紀後半ともなるとロンドンによる毛織物輸出の独占が崩れる一方でヨークの商業的機能が復興を遂げており、その点でヨークとウェスト・ライディング農村工業との結合のための条件ははるかに改善されていたはずである。それにもかかわらず、ヨークのとくに仕上げ・染色中心地としての機能が回復しなかったという事実を説明するのが、以下で展開する議論である。

合」を妨げる。一方で「結合」を牽引すべき仕上げ関係ギルドは弱体化し、そのために問屋制資本家の支配が確立しなかった。そしてギルドの問題に加え、ヨーク周辺の農村工業の弱体性が指摘される（地理的要因）⁴⁷。このように、二つの側面からヨーク毛織物工業衰退の原因を指摘しつつも、坂巻の議論では、前者により比重が置かれているように見え、またこれら二要素がいかに関連しあっていたのかは必ずしも明確ではない。これに対し、本論文は、後者の要因こそが前者のような状況を招いたと考える。すなわち、ヨークの仕上げ工・染色工が弱体で自らの支配を貫徹することができなかったのは、彼らが掌握しうるような農村工業地帯が、そもそも周辺に存在しなかったためと考えられる。そうであったとすれば、ヨークと農村との「結合」の可能性は最初から断たれており、ギルドがいかに振舞おうと「結合」を成功に導く余地はなく、ヨークの毛織物工業の衰退にとって、ギルドの役割は二次的なものにとどまるであろう。以下では、ヨークの毛織物工業の衰退の原因について、坂巻の議論とはプライオリティを逆転させ、衰退の最も根源的な原因が、ギルドの問題よりむしろ周辺農村の毛織物工業の弱体さ、換言すれば地理的要因にあったことを明らかにしたい⁴⁸。

ただし実際は坂巻も、ギルドと同程度に地理的要因の重要性も認めている。彼によれば、毛織物工業が衰退し回復することがなかった中世都市は、農村毛織物工業が弱体であるか、ほとんど興らなかった地域、すなわちミドランズを中心とした「平野地帯」ないし「牧羊・穀作地帯」（混合農業地帯）に位置する内陸の都市に多かった⁴⁹。したがって問題は、ヨークがこうした都市に該当するか否かである。ウェスト・ライディング農村工業の発生に関する先の議論を適用するなら、ヨーク周辺の農村が「混合農業地帯」であって、かつ地域の権力構造が硬直的で、法的・社会的にルーズな状況を生む条件を備えていなかったことを明らかにすれば、坂巻によってわずかに触れられているヨーク周辺の農村工業の弱体さを説明することができよう。

まず、サースク等の研究をふまえて、ヨークの圏域に属する近隣の農村部の農業形態をみていこう。上述のように、サースクによれば、農村工業が根付いたのは穀作に適さないハイランドの牧畜農業地域であった。他方、ローランドの穀作地域あるいは混合農業地域において農村工業が根付くのが困難であったのは、耕作や家畜の飼育への注意が年中求められ、かつ労働力を大量に必要とする共同耕地制が広く行われたために、農村工業の維持に極めて

⁴⁷ 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」、30頁。

⁴⁸ 坂巻のギルド論は、商人や仕上げ・染色工といった勢力による農村工業掌握の試みを論じている。この点において彼の説は、排他的な「中世都市」がギルドなどの経済的規制によって活力をそがれて衰退し、他方ギルド規制などを持たなかった「農村都市」は経済的自由を享受して近代工業都市へと発展するという単純な議論（たとえば大塚史学やヒートンの議論）よりもはるかに合理的である点は指摘しておく。Heaton, *op. cit.*, pp. 34-68. 実際、ギルドの閉鎖性ゆえに都市工業が衰退し、規制の欠如が新都市成長の有力な要因であったとする単純な議論は、すでにP・コーフィールドらによって退けられている。P・コーフィールド（坂巻清、松塚俊三訳）『イギリス都市の衝撃 1700-1800年』（三嶺書房、1989年）、127-137頁。農村工業の台頭と都市工業の衰退という現象は、ギルド規制など単一の原因から説明しうるものというより、複雑な要因の絡み合いの結果とみるべきで、ギルドと都市毛織物工業の衰退は全く無関係ではなかったであろうが、それを強調しすぎてもならない。都市工業およびギルドに対するこうした柔軟な見方は、当然この時期の都市＝農村関係の理解にも修正を迫るはずであり、また以下の議論の重要な前提をなす。

⁴⁹ 坂巻、前掲書、287-291頁。

不利であったためと説明する⁵⁰。ヨークおよびその周辺の農村部は、サースクの分類に従えばローランドの混合農業地帯に位置するが⁵¹、ヨーク周辺の農村部の農業事情をより正確に把握するため、さらに地域を限定して検討する。パリサの研究に従えば、ヨークの商業的影響が強く、また他都市の経済的影響力もそれほど及ばない地域、つまり真のヨークの圏域 (catchment area) として、ヨーク河谷 (the Vale of York) を想定することができる⁵²。この地域の農村部が、本論文でいうヨーク周辺の農村部に該当すると考えて議論を進めよう。この地域の農業事情をみると、ヨークが農村との結合に乗り出した 14・15 世紀からすでに、ヨーク河谷に代表されるヨークシャーのローランド地域では、西部のペナイン地域などに比べ、はるかに穀作および混合農業が優勢であり、農村工業を育むような農業環境ではなかった⁵³。牧畜的な西部のハイランド、混合農業的な東部のローランドという対比は、16 世紀以降一層明瞭になる⁵⁴。このように、ヨークの圏域たるヨーク河谷においては、農業的観点からみて、農村工業が発展する余地は限られていたといえる (図 1 参照)。

ついで、同地域の農村の、法的・社会的環境を検討しよう。先に紹介した閉鎖・開放型村落の二類型を再び適用すれば、穀作あるいは混合農業が優勢であったヨーク河谷は、閉鎖型村落が優勢であったため、リジッドな社会的構造を有し、よって農村工業が繁栄する環境ではなかったと考えられる。実際サースクは、ローランド地域一般の例に漏れず、ヨークシャーのローランド地域 (ヨーク河谷を含む) においても、強固なマナの枠組みが 16・17 世紀にいたっても残存していたと指摘する⁵⁵。このように、ヨーク周辺の農村は、農業面からみても社会的側面からみても、農村工業を積極的に成長させる環境にはなかった。したがって、ヨークと周辺農村との「結合」の失敗の原因は、農業事情を規定する地質・地理的条件に求められよう。

それでは、15 世紀以降飛躍的に発展したウェスト・ライディング農村工業との「結合」の失敗についてはどうか。これに関しては、坂巻がすでに立地上の不利と、ウェスト・ライディング自体における農村都市の出現が指摘しているが、十分な議論が展開されているとはなれない⁵⁶。ここでは彼以降の研究を利用しつつ、ヨークとウェスト・ライディングとの「結合」の失敗を裏付けたい。

まず手がかりとなるのが、新フリーメンの出生地を体系的に記録した 16 世紀中頃の市会計記録 (chamberlain's account books) から、ヨークの移入民の獲得地域および圏域を明らかにしたパリサの研究である。彼は新フリーメンの出身地とヨークの間の距離を分析した結果、ヨ

⁵⁰ Thirsk, 'The Farming Regions of England: A. The Structure of Regions', pp. 13-14.

⁵¹ *Ibid.*, p. 4, Fig. 1.

⁵² Palliser, *op. cit.*, p. 185.

⁵³ E. Miller, 'Farming Practice and Techniques: B. Yorkshire and Lancashire', in *id.* (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. III, 1348-1500, Cambridge, 1991, pp. 183-187, 193; *id.*, 'Tenant Farming and Tenant Farmers: B. Yorkshire and Lancashire', in *ibid.*, p. 602.

⁵⁴ Thirsk, 'The Farming Regions of England: C. Yorkshire and Lincolnshire', pp. 28-40; D. Hey, 'Yorkshire and Lancashire', in Thirsk (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. V, 1640-1750, I. *Regional Farming Systems*, Cambridge, 1984, pp. 69-86; J. A. Sheppard, 'Field Systems of Yorkshire', in A. R. H. Baker and R. A. Butlin (eds.), *Studies of Field Systems in the British Isles*, Cambridge, 1973, pp. 145-167; Palliser, *op. cit.*, pp. 7-10, 185.

⁵⁵ Thirsk, 'The Farming Regions of England: A. The Structure of Regions', p. 9; *ead.*, 'The Farming Regions of England: C. Yorkshire and Lincolnshire', p. 33.

⁵⁶ 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」、30 頁。

ークへの移入民は半径 10km から 20km の範囲から来た者が最も多いこと、他方でウェスト・ライディングの人々はヨークではなく、すでに成長していた織物工業都市と強い経済的つながりを有したため、同地域からヨークへの移入は低調であったことを明らかにした⁵⁷。このように、ウェスト・ライディングにおける新たな「毛織物工業町」あるいは「農村都市」の台頭によって、ヨークとウェスト・ライディング農村工業の結合が妨げられたという坂巻の仮説は、実証的に裏付けられている。

さらに毛織物生産の観点からみると、ヨークの織元や商人がウェスト・ライディング農村工業を掌握しようと試みる際、20 マイル（約 32km）⁵⁸ともいわれる両者間の距離が大きな障害となったと思われる。矢口孝次郎は、16・17 世紀の毛織物工業における、諸工程を通じた運搬労働の重要性を強調している⁵⁹。すでに述べた通り、「都市と農村の結合」とは具体的に、都市（染色・仕上げ、流通）＝農村（紡糸・織布）という分業関係の構築であるが、これには多くの運搬作業を要する。ウェスト・ライディングと近接しているとはいえないヨークの立地を考えると、いずれにとっても、互いの結合はあまり有益な選択とは思われない。加えて、ウェスト・ライディングのただ中にヨークと同様の機能を果たす「毛織物工業町」や「農村都市」が台頭しつつあった以上、両者の結合のメリットはさらに小さくなったであろう。この結合が両者間の距離によって妨げられていたという仮説の蓋然性は、水陸ともに劣悪であった当時の交通条件を考慮すればさらに高まる⁶⁰。このように、ヨークの染色工や商人がウェスト・ライディングの農村工業を掌握しえなかった最も重要な要因として、ギルド規制などよりも、ウェスト・ライディング内部における農村都市の興隆、そして同地域から離れていたヨークの立地上の不利が致命的であったといえよう⁶¹。

3. 17 世紀のリーズにみる「都市と農村の結合」の新局面

以上みてきたように、中世後期から近世にかけて農村工業地帯として成長したウェスト・ライディングにあって、16 世紀から 18 世紀にかけて流通・仕上げ業の中心地へと転換し、「都市と農村の結合」を果たしたいくつかの農村都市が繁栄した。本論文がヨークシャーにおける「結合」の典型例としてとくにリーズに注目するのは、同市がヨークシャー毛織物工業における随一の中心地となったのみならず、1626 年の自治都市化、1650 年代・1660 年代の織元や都市法人の政策といった形で、農村工業を主体的に取り込もうとする政策が展開されたためである。すなわち、地理的要因に恵まれ自然発生的な「結合」に成功した都市が、その上で農村製品の品質管理に乗り出すことで、「都市と農村の結合」は第二の段階に入ったといえる。以下、17 世紀リーズにおける毛織物に関する政策の動向を概観し、ついでその意義を検討し

⁵⁷ Palliser, 'A Regional Capital as Magnet: Immigrants to York, 1477-1566', *Yorkshire Archaeological Journal*, 57, 1985, pp. 111-123.

⁵⁸ 坂巻「近世ヨークシャーの農村都市と特権都市」、34 頁、注 (62)。

⁵⁹ 矢口孝次郎「16・17 世紀のヨークシャーにおける織元の経営形態とその発展」同編『イギリス資本主義の展開』（有斐閣、1957 年）、75-77、88-90 頁。

⁶⁰ Heaton, *op. cit.*, pp. 395-404.

⁶¹ 「リーズの方が製造業（中心地）に近い…」とヨークの立地上の不利を嘆いた 1660 年のある証言は、付近に農村工業地帯がなく、しかもウェスト・ライディング工業地帯と「結合」しようにも、同地域の農村都市よりも不利であるというヨークが置かれた状況を端的に物語っているといえよう。Thirsk and J. P. Cooper (eds.), *Seventeenth-Century Economic Documents*, Oxford, 1972, pp. 373-374.

たい。

(1) 17世紀リーズにおける毛織物工業をめぐる政治的展開

リーズの自治都市化を求める動きは、1622、23年頃始まったとされるが、その目的は新たに毛織物を生産し始めた織元の不正、とくに染色工程における logwood という木の使用を取り締まることであった。1626年7月、国王チャールズ1世の特許状により、リーズは自治都市化され、同市に都市法人が創設された。その指導部は条例制定権と、条例違反者の処罰権＝裁判権をもって市政の運営に当たったが、ヒートンによれば、この市政府は有力な商工業者の「狭い寡頭制」であった。そして、この特許状に基づき、1629年前後に、リーズにギルド（リーズ仕上げ工カンパニー）が創設される⁶²。

その後内乱期を経て、1662年リーズの富裕な広幅織織元は、都市法人とは別に、ウェスト・ライディング全体の工業活動をその支配下に置くべく彼らのコーポレーションを設立した。ここで注目されるのが、この組織が自ら検査役を任命して新たな検査制度を創設し、また技量の保証のため徒弟奉公を定めた点である。このコーポレーションは、根拠となる法の有効期限切れのため、1685年に消滅したが⁶³、他方で王政復古後の1661年に生まれ変わったリーズの都市法人も、市内の商工業を統制しようと独自に試みた。彼らも検査役を指名して多くの違反者を摘発し、徒弟制も定め、さらには種々の職業についてギルドを創設した。最終的には、1661年の毛織物仕上げ業者のカンパニーを含め、全部で6つのカンパニーが創設されている⁶⁴。

ところで、17世紀のリーズにおける毛織物工業の統制に関するこうした政治的動向に関しては、その性格や意義をめぐって先学の間で解釈の相違がみられる。大塚久雄は、一連の措置を、問屋制商業資本家的な性格を持つ「都市の織元」と絶対王政とが結託して行った農村工業抑圧、独占志向の政策としている⁶⁵。一方、武居良明は、リーズは自治都市化によって外見上は「絶対王政の藩屏」と化したのが、実質的にはウェスト・ライディングの小織元にとつての「商業中心地」、地域市場の性格を失うことはなかったとする。彼はむしろこうした政治的展開を、流通中心地化という産業構造の変化と関連づけて把握する⁶⁶。坂巻清は、これらの施策を、大織元や商人たちが、不正を防止して市場を安定・拡大させ、また自らの寡頭支配層をうちたてることで、小織元や問屋制下の直接生産者を自らの安定的な蓄積基盤とすることを狙ったものと説明する。また坂巻は大塚らと異なって、リーズの織元や商人の主導による問屋制の展開を単なる農村工業抑制策とはみず、農村に散在的に広がる紡糸・織布工程が発展するためには、農村都市の問屋制支配によって組織・編成される必要があったと論

⁶² Heaton, *op. cit.*, pp. 220-226; 常行、前掲論文、102-124頁。1630年に制定されたこのカンパニーの条例は、刊行されている。J. W. Kirby, *The Manor and Borough of Leeds, 1425-1662: An Edition of Documents*, Thoresby Society, 1983, pp. 219-230.

⁶³ それでも1692年には、このコーポレーションを復活するよう請願がなされている。Heaton, *op. cit.*, pp. 228-234.

⁶⁴ これらカンパニーは自ら構成員を統御するための規約や内規をつくってもいたが、1720年以後顧みられなくなっていく。*Ibid.*, pp. 234-241.

⁶⁵ 大塚、前掲書、344-346、359-360頁；同『大塚久雄著作集 第3巻 近代資本主義の系譜』（岩波書店、1969年）、388-390、392-394頁。

⁶⁶ 武居「領主的バラ・リーズにおける毛織物工業の展開（二）」、163-171頁。

じる⁶⁷。ついで武居説や坂巻説を批判し、全面的にはないが大塚説を支持したのが常行敏夫であった。彼は、「リーズ市仕上げ工カンパニー」の条例を分析した上で、リーズの自治都市化およびカンパニー創設を、その背後にある絶対王政期のカンパニー設立ともども農村工業の抑圧策とし、都市工業を救済するための政策であったとみなす⁶⁸。

ところで、以上のようなわが国の先行研究に共通する問題点として、「絶対王政」などの用語が頻出するなど、議論がややアナクロニスティックであるという点はともかく、自治都市化やカンパニー創設の請願にみられる毛織物製造における不正の問題、換言すれば品質の問題がそれほど重視されていないという点を指摘しておかねばなるまい。近世イギリス毛織物工業が抱えていた深刻な品質問題は、とくにわが国では従来あまり重視されてこなかったが、序論でも触れた通り、近年、ネーデルラント史家の佐藤弘幸が極めて重要な問題提起を行っている。以下では佐藤の指摘をふまえつつ、イギリス毛織物工業、とくに農村毛織物工業が抱えていた品質問題と、その対策を論じ、その上でリーズの自治都市化やカンパニー創設といった政策が有した意義について、新たな解釈の可能性を提示したい。

(2) イギリス毛織物工業の危機と品質管理問題：「都市と農村の結合」の第二段階

イギリスの毛織物輸出は 14 世紀半ば頃からすでに羊毛輸出を凌ぐ勢いを示したものの、1550 年代半ばの不況以後急速な成長はみられなくなり、1620 年代には深刻な危機に陥った。注目すべきことに、同時代人による輸出危機の原因分析の中では、毛織物製品の品質問題がしばしば取り上げられ、その対策として組織的品質管理が推奨されている。しかしながら、奇妙なことに、危機の原因としての品質問題は、今までイギリスの研究者の間では深刻にみなされてきたとはいいいがたい⁶⁹。それだけに、ネーデルラント史家としてイギリス毛織物工業における品質問題の存在を正面から取り上げた佐藤の指摘が、重要な意味をもつのである。

15 世紀半ば以前にはイギリスから輸出される毛織物は完成品が大半で、外国への染色・仕上げの依存という事態はみられなかったのに対し、16 世紀になると、ロンドンからアントワープへの一大輸出ルート（いわゆる「ロンドン＝アントワープ枢軸」）を圧倒的な量の白地広幅織（とくに西部農村産）が流れ、その仕上げをアントワープが担当するという国際的分業関係が形成された⁷⁰。佐藤によれば、こうした一種従属的な国際分業関係が成立した背景には、イギリス産毛織物の低品質という問題があった。その深刻さ、さらにはそれをチェックしえなかったイギリス側の検査制度の不備は、アントワープにイギリス製毛織物を専門とする検査人制度が存在した事実からもうかがいしれよう⁷¹。すなわち、14・15 世紀までのイギリス毛織物工業は、発展する農村工業に都市工業が関与することで、農村工業の抱える品質問題が表面化するのを回避していたが、「ロンドン＝アントワープ枢軸」の急速な発展により、農村製毛織物が地方都市での品質検査を経ずにロンドンに集中し、ロンドンでも厳密な品質管理がなされないまま、農村の粗悪な毛織物がそのままアントワープに流れるようになった

⁶⁷ 坂巻「近世ヨークシャーにおける農村都市と特権都市」、13-16 頁。

⁶⁸ 常行、前掲論文、111-118、124-143 頁。

⁶⁹ たとえば、B. E. Supple, *Commercial Crisis and Change in England, 1600-1642: A Study in the Instability of a Mercantile Economy*, Cambridge, 1959, pp. 143-147.

⁷⁰ 船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』（未来社、1967 年）、37-40 頁。

⁷¹ 佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（3）」、105-109 頁。

のである⁷²。

確かに、イギリス毛織物工業は都市のギルド規制から自由な農村工業として発展してきた結果、生産コスト面で優位を獲得した。だが反面、技術水準と製品の品質を一定レベルに維持する制度的保証の欠如という深刻な欠陥は、商品の価値を決定する染色・仕上げ工程の海外への依存、しまいにはアントワープ市場崩壊に伴う毛織物輸出への大打撃という重大な結果をももたらした。結果、イギリス側も品質問題に真剣に取り組まざるをえなくなったのであるが、イギリスの場合、毛織物が主に農村で生産され、都市のギルド制度もほとんど実効性を失っていたため、国家が品質管理に乗り出さねばならなかった。ところが制定法による規制（これはとくにテューダ期、1550年代以降本格化する）、そして毛織物検査官（*ulnager*）の指名など、国家による品質向上の試みは大きな成果を挙げられず、有効な品質管理のための制度は16世紀中ついに現れなかった⁷³。

他方で、とくにイングランド東部では、16世紀半ば頃から、スペインの弾圧を逃れて流入してきた南ネーデルラントのカルヴァン派難民を呼び寄せ、彼らのもつウーステッド工業、いわゆる「新毛織物工業」を導入する都市がみられた。ノーフォークのノリッジもその一つで、同市は彼らが持ち込んだ「ノリッジ・スタッフ」の生産により、国内の毛織物工業が全般的に停滞に陥っていた中で、イギリス有数の織物工業中心地に成長した。この発展の鍵となった制度が、ネーデルラント難民たちの制度「ホール制」である。これはクロス・ホール（*cloth hall*）で毛織物の検査を行い、合格品には検印を与えるという仕組みで、難民のみならずイギリス人生産者をも巻き込み、周辺農村部へも影響を及ぼしていく。このように、ノーフォークでは、中心都市ノリッジが周辺の農村に対して「ホール制」を通じた品質管理を及ぼすことで、従来イギリス農村工業が抱えていた深刻な品質問題が克服された⁷⁴。

また、ネーデルラント難民の直接的な影響を受けなかったデヴォンシャのエクセタにおいても、ノリッジと異なる形で品質管理体制が築かれた。同市の織布工・縮絨工・仕上げエギルドは1620年、未熟練者の参入による品質管理不徹底を理由として、国王により法人化されて自治組織となり、規約制定権、裁判権、罰金徴収権を獲得した。このエクセタの組織は基本的に周辺農村に対して直接的な権限をもっていなかったが、農村製品に対してその出来映

⁷² 佐藤「<再考>都市工業と農村工業」、57-58頁。

⁷³ 佐藤によれば、このように国家がまるで都市ギルドのように毛織物の規格を詳細に規定し、製造工程における不正防止に乗り出すといった事態は、イギリスに特異なものであった。佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（2）」、261-263頁；Heaton, *op. cit.*, p. 130. 国家の制定法による規制については、Heaton, *op. cit.*, pp. 126-143；佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（1）」、178-179頁；「同（2）」、263-265頁；「同（3）」、112頁。毛織物検査官制度のヨークシャにおける実態については、Heaton, *op. cit.*, pp. 127-129, 177-185. またロンドンの毛織物取引施設ブラックウェル・ホールも、国家による政策とは別に毛織物を検査していたが、これもやがて形骸化していく。Ibid., p. 149；佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（3）」、111頁。

⁷⁴ 安元、前掲書、第2章；佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（3）」、116-121頁；「同（4・完）」、13-17頁。ただ安元は、こうしたホールについて市当局のイニシアティヴを指摘している。安元、前掲書、149-151頁。同様の「ホール制」およびコーポレーションはコルチェスタにも誕生しており、こちらも成功をおさめている。佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（4・完）」、17-21頁。なお、リーズにもクロス・ホールは存在したが、これが現れたのは18世紀に入ってからのものであり、しかもノリッジのような「ホール制」に基づく品質管理を志向したものではなく、屋外市場を改善した末生まれた販売を主目的とするホールであったようである。Heaton, *op. cit.*, pp. 359-392；坂巻『イギリス毛織物工業の展開 産業革命への途』（日本経済評論社、2009年）、第6章。

えを最後の仕上げ・染色工程段階でチェックしうる立場にあり、こうした形で農村製品の品質管理が行われた。これもまた、都市が農村毛織物工業の品質管理を主導するひとつの方法であった。かくして、エクセタは17世紀後半から18世紀初頭、周辺農村とともに新毛織物、とくにサージ織工業の一大中心地となった⁷⁵。

17世紀には、こうした成功に触発され、他にも組織的品質管理を主眼としたコーポレーションおよびカンパニーの設立が相次ぐ。佐藤はリーズの自治都市化やギルド設立、また1660年代の広幅織コーポレーション設立もこうした動きの一環で、農村工業に対する都市の寄与があった可能性を示唆している⁷⁶。実際リーズに創設された諸カンパニーも、その目的と機能をみる限り、ノリッジやエクセタのものと大きな差はないように思われる。

序論でも触れたが、イギリスにおける研究動向をみると、ヨークシャ毛織物工業の品質問題にもある程度注目し、一連の組織の創設を品質管理との関連で捉えている。ヒートンは、イギリス製毛織物の中でも、ヨークシャ製はとくに低級品であったと繰り返し指摘し⁷⁷、17世紀リーズにおける政治的展開を、同世紀前半における品質問題への関心の高まりと関連付けて論じる⁷⁸。しかしながら彼は、世紀半ばの広域的コーポレーションについて、市内においてのみ厳格な品質管理がなされることに不満を抱いたリーズの生産者が、市外にも品質管理を拡大した措置と捉えており、純粹な動機による農村工業の品質改善策と解釈しているわけではない⁷⁹。他方ウィルソンは、そもそもヨークシャ毛織物工業の品質問題をそれほど深刻なものとはみず、また品質の向上についても、カンパニー、コーポレーションの寄与よりも、むしろ商人によるチェックや消費者の要求などを重視する⁸⁰。またJ・W・カービィは、一連の組織を産業統制・技量維持の試みと捉えつつも、組織的品質管理の効果については論じていない⁸¹。

このように、現在の研究水準においては、リーズのカンパニーやコーポレーションが、ノリッジやエクセタのような劇的な品質向上を達成したか否かという判断を下すことはなお困難であろう。しかし、リーズが流通や仕上げ・染色業によってウェスト・ライディング農村工業と結合するだけでなく、ギルド的組織を通じ、品質管理という形で積極的に関与しようとしたことは間違いない。佐藤の提起をふまれば、17世紀リーズに現れた組織的品質管理の「意義」は再検討に値するものといえよう。実際、近年 *Economic History Review* 誌上において、S・R・エプスタインとS・オギルヴィが、近世ヨーロッパ経済におけるギルドの意義

⁷⁵ 佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（4・完）」、21-24頁。

⁷⁶ Heaton, *op. cit.*, pp. 216-220; 坂巻、『イギリス・ギルド崩壊史の研究』、263-264頁; 佐藤「イギリス毛織物工業の展開とネーデルラント（4・完）」、24-28頁。

⁷⁷ Heaton, *op. cit.*, pp. 19-20, 80-81, 106, 124, 132, 145, 205-206.

⁷⁸ 17世紀の諸カンパニー、コーポレーションに関するヒートンの見解は、毛織物製造に関する問題点への対応策とみる点で佐藤に近いものがある。Ibid., pp. 216-219.

⁷⁹ Ibid., pp. 228-230.

⁸⁰ Wilson, *op. cit.*, pp. 12, 162-164. J・スメイルも、ヨークシャ毛織物工業における品質向上は、オーダー生産の増加などにより、生産と市場とが密接に結びつくにつれて達成されていったとしている。J. Smail, *Merchants, Markets and Manufacture: The English Woollen Textile Industry in the Eighteenth Century*, Basingstoke, 1999, *passim*.

⁸¹ J. W. Kirby, *op. cit.*, pp. lxxvii-lxx. ところで、ヨークシャ毛織物工業と海外市場の関係は、本論文における重要なテーマである。しかし問題の複雑な性格、および紙幅の関係もあり、また別の機会に論じたい。

をめぐる論争を交わしており、ヨークシャに関して、より詳細な検討が待たれる⁸²。

結論

以上より、中世後期から近世のヨークシャ毛織物工業における「都市と農村の結合」の二つの段階に関する総括を行いたい。まず、15世紀以降ウェスト・ライディング農村工業が台頭するなかで、リーズが農村との「結合」に成功したのに対し、14世紀までヨークシャにおいて中心的な位置を占めたヨークの毛織物工業は、農村との「結合」の失敗を主な要因として、15世紀を境に衰退の道を辿る。その「結合」の成否を左右した要因として、本論文では地理的要因に着目した。リーズが農村との「結合」するに際しては、同市がウェスト・ライディング農村工業地帯のただ中に現れた都市であり、また同地域西部の主要工業地域と州東部の穀物供給地および主要輸出港ハルとの中間に位置した、という立地が有利に働いた。他方ヨークの場合、立地に恵まれなかったために「結合」に失敗した。第一に、ヨークと最も緊密な関係を持った周辺農村は、農村工業の発展に適さない環境であって、同市の商人や仕上げ業者が結合を望みうるような農村工業地帯ではなかった。第二に、ウェスト・ライディングとの結合に関しては、同地域内部における「毛織物工業町」や「農村都市」の成長、さらにヨークと同地域を隔てる距離が、両者の結合を妨げた。

さらに本論文では、ヨークの事例からギルド規制の存在を中世都市衰退の原因とみてきた旧説を退けた上で、近世イギリス農村工業の品質問題に都市が積極的に対処したという佐藤の指摘をふまえ、一定の技術水準を保証する都市のギルド規制は、むしろ農村との「結合」を補強し、毛織物工業に立脚した繁栄を築く上での不可欠な要素であったと再解釈した。その上で、坂巻の「結合」論への批判として、「農村都市」リーズにおいて組織的品質管理の試みがなされたという事実を、「都市と農村の結合」の第二段階と位置づけ、従来の経済史研究においては注目されてこなかった都市＝農村関係のあり方として、その意義を再検討する必要性を喚起した。17世紀以降、品質問題の表面化に加え、自国における仕上げ工程の確立を迫られたイギリス毛織物工業が転換を強いられるなかで、「結合」のあり方にも変化が生じたとみるべきである。また、都市による品質管理の意義が十分に評価されていないという問題点は、プロト工業化論についても同様である。プロト工業化論も、都市の間屋制商人が散在的な農村工業を指揮して販売の便宜を図ったり、仕上げ業など熟練を要する工程を都市が受け持ったりと、農村工業の成長における都市の一定の役割を認めている⁸³。しかし本論文でみたように、流通や仕上げ・染色業を通じた寄与のみならず、農村製品の品質管理という都市のより積極的な機能を視野に入れるならば、農村工業論はさらに深みを増すように思われるのである。

⁸² S. Ogilvie, "Whatever is, is right?" Economic Institutions in Pre-Industrial Europe', *Economic History Review*, Vol. LX, No. 4, 2007, pp. 649-684; S. R. Epstein, 'Craft Guilds in the Pre-Modern Economy: A Discussion', *Economic History Review*, Vol. LXI, No. 1, 2008, pp. 155-174; Ogilvie, 'Rehabilitating the Guilds: A Reply', *Economic History Review*, Vol. LXI, No. 1, 2008, pp. 175-182.

⁸³ D. C. Coleman, op. cit., 437; メンデルス、前掲論文、106-107頁; クラークソン、前掲書、32-33頁。